

Hilary Mantel の歴史小説に観察される女性像

A Place of Greater Safety を中心に

梅川桂子

1. はじめに

歴史は長らく権威側の男性によって書かれ、その記述から女性は排除されてきた。Hilary Mantel(1952-2022) は、Henry VIII 世時代の *Wolf Hall* 3 部作(2009,2012,2020)の成功により Tudor 朝歴史小説家のイメージが強いが、初期にフランス革命を描いた長編歴史小説 *A place of Greater Safety*(1992)を発表しており、両作で語ることでできない受難者＝死者に声を与えている。*Wolf* がほぼ Thomas Cromwell の視点から描かれているのに対し、*A Place* では交錯する多くの人物の視点や語り手の人称が唐突にスイッチされ、場面も頻繁に移動する。Mantel はパリの街をパッチワーク構造とし、登場人物らの公私を共に描くことでパッチワークの境界上を自由に跨がせシームレスな構造に仕上げていると Carpenter は分析している。本稿では、男性たちの公私をシームレスに描写することにより周辺の女性たちも描かれていることに注目し、歴史小説 *A place* が、その構造ゆえに敗者の代弁者として語る Mantel のナラティブ内に、激動の革命時代に奮闘した女性らにも存在感が与えられていることを指摘する。

2. 女性作家による歴史小説

Virginia Woolf は 1923 年に女子学生に向けて行った講演で、女性についての本は少なく、イングランドでは男性が権力と影響力を有し物事を決めていくと語り、また男性が Rebecca West をひどいフェミニストだと非難するのは、男性の領域を女性が侵犯することに冷静でいられないからだとして分析している。それは約 70 年後の Mantel への批評にもみられる。*A Place* の発表直後、Mantel の仕事に一定の評価をしながらも、Henry James が歴史小説を書いた友人の女性作家に苦言を呈したことをあげ、革命という歴史的重大事象を個人的なことに還元することはできず、歴史小説は一種の娯楽にすぎないと Furbank からの批判がみられた。Woolf が West に対する非難を分析したように、女性作家が歴史小説に挑むことに男性側から示された難色といえる。女性作家による歴史小説は、当初は歴史上の重要人物との恋愛や推理小説など歴史を舞台に女性を登場させることが多く文芸批評としての評価は低かったが、次第にシリアスなテーマに取り組むようになったと Wallace は指摘している。90 年代にブリトンで女性作家が死者をテーマにし Mantel が *A place* を出版した頃、カナダでは Margaret Atwood が 19 世紀に 16 歳の少女が殺人事件の被疑者となった事件を主題とした小説を発表する(*Alias*)。Atwood は *Negotiating with the dead* の章で私たちが耳の傾け方を知っていれば死者は語ると述べている(*On Writers*)。Mantel は“the dead have power” (1996)であるからと死者に声を与える Atwood の手法を評価しているが、それは敗者の代弁者として死者に語らせるという Mantel の歴史小説の特徴でもある。

3. *A Place of Greater Safety* の構成

フランス革命の立役者であった 3 人の法律家 Danton, Desmoulins, Robespierre を中心に革命前から 1794 年に Camille と Danton が処刑されるまでを描いており、人物紹介で 6 ページ分を占める登場人物らがパリの街を頻繁に移動し、多用される会話文がそれぞれの主張を示し、語りの人称や時制も変化する構成となっている。Carpenter は、都市を俯瞰してみた際に自在に移動する人の群れをテキストに例える Certeau の都市空間理論(日常 252)を Mantel に当てはめ、一貫した歴史物とせず、歴史事象や人物をパッチワーク構造でつなげ公私を取り交ぜて描く手法により Mantel は死者らを架空都市空間で自由に動かしていると分析している。パッチワーク構造は不確実性を示すものである。Atwood が *Alias* で女性の弱さや運命を織りなすキルトを用いており、キルトは見方で異なる様相を呈することから Grace の有罪性に疑義が示されると Mantel は指摘している(Murder)。Atwood が少女を主人公に据えている一方で Mantel は Cromwell や革命家の男性らを中心としているが、女性が家庭内で担う針仕事は男性の仕事に対応するものとして描写し、権力や影響力を持つ男性の描写の中に女性の役割を織り込むことで、男＝公、女＝私という境界の橋渡しを可能としている。Robespierre の‘History is fiction.’ (*A Place* 24) という発言や、*A Place* を読むのは作家と読者の共同事業であり最もあり得そうにないことが真実であるかもしれないとの言葉(*A Place* x)には、歴史は一つのフィクションであるため、歴史の単なる受容者とならず他の可能性を個々が想像すべきであるとの Mantel の歴史小説に対する考え方だと捉えられる。Mantel は、不確実な歴史を語るために私生活のフィクション性を利用して「シームレスにするには困難な過去の事象」をつなぎあわせ多様に解釈可能なパッチワーク構造を用いていると推察する。その結果、主要登

場人物の周縁にいる女性たちの個々の奮闘がいかにか描かれているかを次章で提示する。

4. 女性たちの描かれ方

周縁の女性たちの描かれ方を、革命家たらんとし恐怖政治下で処刑された Lucile、娼婦であると揶揄されつづも毅然と暴動に加わる Anne、度重なる出産で命を落とす Gabrielle を例に示す。

① Lucile Duplessis

自分の日記を記していた数少ない女性で、Mantel は Lucile の書くことにこだわる点や意志の強さを示すために、三人称の語りの中に頻繁に自由間接話法を用いている。16歳で自分の考えを日記に記す意思を表明する際には自由間接話法を挟んでいる (*A Place* 74)。*A Place* はシームレスに描写しているため、革命家らは裁判所や国民議会に行く合間に結婚式に教会に行き、実家の親に会いに行きもする。Lucile は、革命で名を挙げた Camille と結婚すると、夫が書いた小冊子を読み、革命家の仲間らとの会話を聴きながら自分の意見を持つようになる (*A Place* 251)。恐怖政治が始まると“*One day these walls will split, one day this house will fall down. There will be soil and bones and grass, and they will read our diaries to find out what we were*” (*A Place* 619) と自由間接話法で Lucile の心中が描かれる。いよいよ夫らの運命も予測がつかない事態になると、自分の思想を細かく記し始める (*A Place* 652) が、自分も逮捕される時は警察の足音を聞きつけるや日記を破壊し消去する。Mantel が描く Lucile の日記の内容は Robespierre や警察が知ることはないと同時に読者も知りえず、Mantel は読者に考えさせるように仕向けているのではないだろうか。

② Anne Théroigne

1789年の革命前夜、国民議会の招集を叫ぶ第三身分に群衆が加わり軍隊も出動する事態にパリが陥る中、Camille は乗馬風のベルトにピストルを刺し、赤と青のリボンで髪を結わえている若い女性に出会う。Anne Théroigne だと名乗る女性は、赤と青がパリの色だからと言い、後日、自分のリボンを外して Camille のボタンホールに結わえ付ける (*A Place* 226)。Mantel の描く Théroigne は、教育が十分でないために自分で記すことはできないが、常に戦場の最前線に位置して民衆を扇動し、革命家らの視線の先にいる。歴史ではパンの高騰によりパリからヴェルサイユに行進した女性たちは一括りにされてきたが、Mantel はその中の一人に Théroigne を描く。革命の最前線の様子は臨場感ある現在形で、パリに舞台が移ると過去形になると比べ緊迫感を醸し出している。Théroigne は、記す Lucile とは異なり民衆を扇動する声を持つ女性として終始描かれる。

③ Gabrielle Danton

親が画策した通り、父の経営するカフェに集まる有力な若者に選ばれる人生を受け入れ、中心的役割を果たした革命家の妻となる。政治活動とは距離を置き、妊娠と出産を繰り返し産褥により夫より先に命を落とす。Gabrielle の意思や行動は強く表現されていないが、夫のいるパリに留まり、出産の苦しみに耐えるという女性にしかできない労働を不平を言わずに担っているのだと解釈できる。

5. 結論

Hilary Mantel は、*Wolf* の成功により Tudor 朝歴史小説家としてのイメージが強いが、初期に発表した *A Place* はフランス革命を主題としており、*Wolf* と同様に歴史的敗者側から語り直す戦略として歴史小説を位置づけている。本発表では、多くの人物の公私を交錯させ、場面を頻繁に移動し、また語る人物の人称や時制を描写に合わせて変化させることで *A Place* にシームレスなパッチワーク構造を成立させていることを考察した。その結果、歴史のうねりを生み出す男性たちの描写の隙間に奮闘している女性たちの姿が表れており、その多くが自分で考えた生き方を模索していることから、Mantel の女性に向ける視線が自ずと現れていると考える。

引用文献

Atwood, Margaret. *Alias Grace*. Anchor Books, 1996.

---. *On Writers and Writing*. Virago Press, 2015.

Carpentier, Ginette. *HIRALY MANTEL*. Bloomsbury Academic, 2018

Mantel, Hilary. *A Place of Greater Safety*. Atheneum 1993.

---. “Murder and Memory.” *The New York Review of Books*, Dec.19 1996.

---. *Wolf Hall*. Picador, 2009.

Wallace, Diana. *The Woman's Historical Novel —British Women Writers 1900-2000*. N.Y., Palgrave MACMILLAN, 2005.

Woolf, Virginia. *A Room of One's Own and Three Guineas*. Penguin Classics, 2019

de Certeau, Michel 著 山田登世子訳 2021 『日常実践のポイエティック』ちくま学芸文庫